公教育の場における「公共性」と「民主主義」の原則
―ドイツでの体験をもとに―

志水　紀代子

はじめに

子どもの目線で、今の子どもたちの負う、死別や離婚・再婚の具体的な現実に踏み込んで問いかけていく実践活動は、成長した後の子どもたちの、人としての生き方のヒントになる確かな原点を彼らに与えていくように思われる。そのような教育を実践している学校がこの日本にあり、世界各地から見学者が訪れているのを知って、胸が躍った。神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校である。そこで中心になって教育改革を行った故大瀬敏昭校長のスーパーバイザーとして、共にこの実験教育に携わった教育学者の佐藤学は、「学び合う共同体を支えるのは「公共性」と「民主主義」の原則である[1)]」と述べている。このコンセプトは、筆者がベルリンのギムナジウムで参観した歴史教育のコンセプトや授業形態につながるものであった。実験的なモデル授業ということであれ、実際にこの日本においてそのような公教育が行われていることは特筆に値する。これからの教育の方向性をここに見出して、時間がかかってもこれがさらに広がっていくことを願っている。

筆者は25年前、当時小学校４年生と高校生になったばかりの二人の息子を伴って、一年間ミュンヘンに滞在したことがあった。日本の学校教育現場を離れて体験した一年間は、それぞれのその後の二人の生き方に大きく影響している。日本に帰国してからの彼らの学校生活は、その体験のいわば応用問題であった。紆余曲折を経るなかで、彼らはその体験を受けとめ、逞しく成長してきた。それを物語るこんなエピソードがある。

1999年にドイツ空軍がNATO軍として第二次世界大戦後初めて戦闘に参加、コソボに空爆を行なったというニュースが流れたときに、「あいつ等も行っとるかもしれん」と、下の息子が呟いた。その戦争のニュースが身近な「あいつ等のこと」として彼に受け入れられているのを知ったとき、彼を受け入れてくれたドイツの小学校で彼が送った日々を思い出した。それは彼にとって世界を知るかけがえの無い体験だったのである。

こうした体験をベースに、筆者は日本の戦後教育のさまざまな問題にコミットしてきたが、その後日本は90年代に入って旧ソ連の解体後、右傾化が加速的に進行し、2006年に安倍政権誕生以降、教育基本法が改変されることが本格化してきた。そのとき、このような日本の問題を読み解いていくために、改めてドイツの戦後教育の現場で、一体どのような歴史教育が子どもたちに行なわれているのかをこの眼で確かめて来たいと切実に思った。そうした思いから、2006年９月に２週間、2008年２月から３月にかけて３週間、ベルリンのギムナジウムを中心に、調査を行なうこととなった。

ドイツの学校法の中で、最重要な目的として、「子どもたちが自ら選択判断していく力を身につける」が挙げられている。ドイツの国是とされる「過去の克服」の４本柱の一つ

である歴史教育において、果たして第三帝国時代の歴史教育に多くの時間が当てられている実態を目の当たりにし、またそれに携る教師たちと懇談するなかで、具体的な教授法を直に見聞きすることができた。また子どもたちの生の声を聞くことで、そこにはさらに深い意味があることも知ったのである。

今回、筆者がベルリンで調査した現場を振り返りつつ、このドイツの教育の場において、「公共性」と「民主主義」の原則がどのように具体化されているかについて述べてみたい。合わせて日本の公教育を取り巻く厳しい現状にメスを入れていきたいと考える。

レッシング・ギムナジウム（Lessing-Gymnasium）の現場から

2006年９月に最初に調査したレッシング・ギムナジウムLessing-Gymnasium（校長Anita Mächler）の報告をしたい。こちらは学校の歴史も古く、筆者のような外国人の研究者の受け入れもしばしばやっていて、先生たちとの懇談も手馴れたものだった。ここでは、大学入学資格試験であるアビトゥア（Abitur）を、「歴史」の科目で受験する生徒たちの授業を見せてもらい、後で別のクラスの「政治」の授業も参観できた。「歴史」のクラスでは16人の生徒が４つのグループに分かれて、それぞれが選択したテーマで共同の原稿を作成し、OHPで教室の壁に資料を映し出して、担当した生徒が代わる代わる各自が調べてきた内容を発表していた。いかにも場慣れしているのは、そのようなやり方が常態化していることを示していた。その授業の最初に、日本から来た筆者に、自己紹介が求められ、どのような意図でこのような取材を行なうのか、またビデオ撮影について何に使うのかと質問された。それに対して、子どもたちの前で、「日本とドイツが敗戦後の教育のなかで、軍国主義時代のことをどのように教育の中に取り入れ、教えているのかを比較して、日本の戦後教育の中で保守化している若者に、その両国の取組みの違いを知ってもらい、彼らに昨今の日本の政治の右傾化を知らせたい。そのための教材としてビデオを活用したい」と説明して了解してもらった。担当のフロイント（G. Freund）先生は、「ドイツも戦後直ぐには占領軍のアメリカの指導の下でプログラムが作られたが、次第にドイツ人自身の中から自分たちで、二度とヒトラー政権当時のような時代を迎えないための歴史教育のプログラム作成をしようという機運が盛り上がり、その後はその時代を詳しく学ぶための教科書がつくられ、今日に至っている」と説明された[2)]。筆者の参加を授業のなかに取り込んで子どもたちに説明するあたり、さすがであった。

授業の最後に、今回の授業テーマは「インペリアリズム」―「帝国主義時代」だったが、「第三帝国時代」の歴史については、どのようなことを学んでいるかを聞いてみた。また、その時代のことを学ぶことは、今のあなたがたにとってどのような意味があるかという質問をぶつけてみた。クラスの子どもたちすべてがしばし思い悩む風だったが、その後一人の男子学生が、「その時代のことを知ることによって、今の自分たちが、どのような判断が必要かを知ることができる」と、答えてくれた。後で、それは学校法に謳われている、こちらの教育目的であることが確認できたのだが、それをただオウム返しに口にしたのではなく、自分たちの体験に裏打ちされて、その中から出てきた言葉であったように思われた。このことは、もう一つ訪問したオーバーシューレでインタビューに応じてくれた女子学生が、やはり同じことを述べてくれていたのと期せずして一致していた。

過去に向き合う民主教育

その後校長、社会科長の先生を交えて４人の先生と懇談する時間を取ってもらい、こちらで一般に使っている歴史教科書を見せてもらいながら、授業の進め方について詳しく聴くことができた。参考に見せてもらった教科書は３冊、それぞれに記述の難易度が違っていたが、第三帝国時代については、ユダヤ人問題だけでなく、少数民族の虐待の箇所も含めて、どれも50ページほど記述があった。その情報量は、日本の教科書とは明らかに大きな差があり、過去のその時代に向き合う「国家姿勢」の違い、取り組みの差としてあることは明らかだった。

ところで、筆者の自己紹介の折に、アーレントの政治思想をベースに仕事をしていることを述べ、こちらでアーレントについてどのように教えているのかを尋ねてみた。フロイント先生によれば「全体主義について教えるときに、彼女の理論を紹介する。そのとき彼女と異なる理論の紹介もあわせて行なって、子どもたちに比較検討させ、自分で判断させる。アーレントの理論に賛同するのであれば、何故自分がそれを採るかについて、その理由をきちんと理論化して述べるようにさせる」ということであった。要は、生徒たちが自分で判断することが大事なのであり、そのためのヒントは教師が彼らの討論に参加する中で出していくということである。実際に教室で行なわれる授業に参加してみた経験から、それがどのように行なわれているかは容易に想像出来た。そして、大事な事は、子どもたち自身が、学習過程のなかでそのような素養を身につけてきているということである。自分の意見を述べることは、権利でもあり、責任でもあるという自覚が自ずと出来ている。これは、国民性とみられてきているが、長年の教育の成果がもっとも顕著に現われたものであろう。討議するということは、民主主義教育の原点である。自分の意見を述べると同時に、他者の意見にも耳を傾けて、自分の考えの枠組みを作っていく。筆者自身が実際に学習現場で取り組めていないだけに、このことの大事さと難しさを、改めて痛感させられた。そして、日本における戦後民主教育の成果と課題を思い起こすことになった。

先述したとおり、ドイツでは州ごとに、教育は独自に行われている。どのような子どもを育成するかについてベルリンの学校法第２条に書かれている基本目的は、他の州ではどうなっているのかという問いについては、校長も交え、そこに居合わせたすべての先生が、これはどの州でも変わらない基本的なコンセプトだと言われた。第三帝国時代に時間を多く取って学習することは、「過去の克服」ということがドイツの国是となっているからであり、州ごとに教育のスタンスが多少違ってもこの基本的な姿勢には変わりは無いと明確に言われた。

このことによって、国家としての基本姿勢が公教育の基本原則に反映されていることを改めて思い知らされたのである。日本はどうであろうか。

国家の基本姿勢と公教育―日本の場合

ここで、靖国参拝を強行した小泉首相（2007年８月当時）の発言を紹介してみたい。

> 「一国の首相が、一政治家として、一国民として戦没者に対して感謝と敬意を捧げる。哀悼の念を持って靖国神社に参拝する。二度と戦争を起してはいけないという事が日本人から「おかしい」とか「いけない」という批判が（されることに対して）私はいまだに理解できません。<u>精神の自由、心の問題、これは誰も侵すことのできない憲法に保障されたものであります</u>」（強調　引用者）

彼のこの発言は、当時、対外的に物議をか

もしたが、例によって国内では、「明快で非常に分かり易く率直だ」として歓迎する向きも多かった。中国人のドキュメンタリー映画作家の李纓（リ・イン）監督は、10年の歳月をかけて完成させた話題作「靖国[3)]」(2007年)のなかに、この発言をする首相を登場させている。李纓監督は、この首相の発言のなかに、奇しくも公の「日本の戦後民主主義」が凝縮されているのを感じ取ったのであろう。

首相のこの発言は、丸山眞男が「誰も責任を取らない」国家＝日本、と表現したことを、文字通り体現したものであった。公的な立場にあるものが取らなければならない責任を、彼は、故意にか、あるいは文字通り無自覚にか、あっけらかんとすり抜けてしまい、一国民としての権利を主張したのである。国民のなかでもその権利が国の施策によって束縛されあるいは奪われている被抑圧者のマイノリテイの国民の側に、最高権力者が逃げ込んだ構図は、ブラックユーモア以外のなにものでもない。あるいは児戯に等しいともいえようか。

無自覚で自己中心的な最高権力者がここでその根拠として挙げた憲法は、彼自身が率いる政党が、永らく政権の場にあって改変を願ってきたものである。システムとしての行政管理機構の機能がよりいっそう強められて、学校教育の現場では、「こころのノート」が義務教育の子どもたち全員に無償配布され、戦前戦中の為政者のナショナリズムが、国家の要請する「あるべきこころ」として強要され、「国旗・国歌法」を盾に、教育委員会がそれに従わない教員の処罰を行っているのである。あろうことか子どもたちは、自ら考え、疑問をもつ自由権を奪われているのであり、その権利を擁護し、守ろうとする教員を、逆に現場から弾き出そうとしているのである[4)]。

「世界史未履修問題」の背後にあるもの

政治学のクスミン（S. Kusmin）先生のほうから、「第三帝国時代の学習をするとき、例えば「過去の克服」というところで、ドイツ、イタリアについては、割合詳しく教えることができるが、日本については残念ながら情報があまりないので、どうしてもヨーロッパのことが中心になってしまう。日本については最近の教科書の問題で中国から批判が出ているということぐらいしか情報がない。ただヒロシマや原爆投下のことは詳しく教えている。

イタリアのやり方は緩慢で、ドイツには馴染まない」と述べられたので、私の方から日本の現状を手短に説明した。ここでは、教科書は年々、新しくなっており、また副教材については教師の自由裁量に任されていて、今のところ自分たちは何の問題も感じていないというのが先生たちの結論だった。

こちらのテキストには第三帝国時代のかなり凄惨な写真も載せられていた。中に日本と朝鮮半島との関わりについて、詳しい歴史地図が載せられていて、果たして日本の高校生たちが学ぶ教科書にはこれほど詳細な記述が載っているのだろうかとショックを受けた。折しもこの時期日本では、教育基本法の「改定」問題とともに高校の世界史未履修問題が大きく取り上げられていた。大学入学試験の科目で、社会科の選択科目で圧倒的に多いのが日本史である。受験中心の授業では、どうしても汎用性のある科目として日本史が中心になるということであった[5)]。

世界史未履修については、後で訪問したもう一つのギムナジウムで、2005年に来日して日本の高校生と交流を持った一人の女子学生が、インタビューに応じて、そのときの日本の高校生についての印象を率直に語ってくれている。このことと関連して、次にそれを取り上げたい。

Hannah Arendt-OberschuleでFrau Heidi Sowと教え子たちに出会う

2006年９月にもう一つ訪れたのがハンナ・アーレント･オーバーシューレ(Hannah Arendt-Oberschule)である。Hannah Arendt-Oberschuleで筆者を受け入れてくださったFrau Heidi Sowは、前任校のダヴィンチ高校の生徒とポーランドのマイダネック強制収容所記念所に行って、そこに残っている資料をコンピュータに入れるなどの作業を毎年やり、そしてその作業の展示会を区役所で開いたりしてきた活動的な先生である。彼女は1995年（戦後50年）と2005年（戦後60年）に、日独平和フォーラムで、高校生を連れて日本に来ているが、95年は当時のダヴィンチ高校の生徒と、2005年には現在の高校の生徒と一緒に来て、日本の高校生と交流をもっている[6)]。

授業の合間の休憩時間に、2005年に埼玉県の上尾高校に行ったイヴォンヌ・キュッパー（Yvonne Küpper）がインタビューに応じてくれた。彼女はこの９月から13年生であったが、一緒に日本に行った学年は既に卒業してしまっていた。彼女は日本の高校生の印象についての筆者の質問に率直に応じてくれ、忌憚のない意見を述べてくれた。彼女の言った言葉の中で、もっとも端的に日本の教育の現状を突いているのは次のことばである。「最初、自分の国の歴史についてはとてもよく知っているのに、他の国については殆ど知らないし、関心がないのにびっくりした。もっと他の国に関心をもってほしいと思った」。

「個々人が自立した判断力を身につける」というこちらの教育の基本コンセプトが、実際にどのように生かされているかについて、日本の高校生と接触した率直な印象を彼女が語ったとき、私は図星を指されて、譬えようのない悲痛な感慨を覚えた。

13年生の後半のSow先生の授業では、ナチ時代にあった出来事から４つの項目を取り上げて、それぞれ４人の生徒がグループを作って報告を行なったのだが、やり方は、レッシング・ギムナジウムと同じスタイルだった。プロパガンダ、ニュールンベルク法など、当時の人々の深層心理まで掘り下げて説明していて、その学習の質の高さに驚かされた。10年生の授業を先に参観したのだったが、その積み重ねの成果をそこで比較して見ることができた。子どもたちの発表の後で、ここでも筆者たちを交えて、質疑応答の時間が持たれた。そのときにクルド人の生徒が、自身が最近、実際に体験したことを述べ、そのような実体験を踏まえて、ナチ時代の研究発表をしていたことが自ずと明らかになった。ここには確かに今につながる問題意識の中で、子どもたちがナチ時代のことから学んでいた。

モニュメント―（Neue Wache）について

さて、筆者は壁崩壊後、1993年・1999年と、ベルリンに来ていたが、来るたびに、新しいモニュメントが増えているのを実感した。「記憶する日」の取り組みは、ともすれば意図的に忘却しようとすることに対する抵抗を示すデモンストレーションである。内側からの教育のみならず、見える形でそれをアピールすることで、国是としての「過去の克服」に向き合う姿勢を示していることに、国として一貫してその加害責任の自覚を強くアピールしている姿勢があることを思い知らされた。

2006年にも「ヴァンゼー会議場」記念・教育館に行った帰りにいくつかのモニュメントを見てきていたが、（例えば、グルーネヴァルト駅（Grunewald）で降りて、「ベルリン・ユダヤ人移送警告碑」をみた。かつてこの駅舎から1943年２月以降数万人のユダヤ人がチェコのテレジン、ポーランドのワルシャワ、ウーチ、クラクフなどへ移送されたという。

ここに「17番線」メモリアルがある。線路側のプラットフォームの縁にそって、ここから何年何月に何人が何処へ移送されたのかが刻まれていた。）このあと、ベルリン滞在最後の日に、いくつかのモニュメントを観る機会があった。まずブランデンブルク門に近い「ホロコースト記念碑」（Holocaust-Denkmal Berlin）、2005年５月に完成した巨大な石のモニュメントである。地下にある資料館には長い行列で入るのを断念した。近くの議会前の石畳の一角に、殉難議員のモニュメントもあった。また、1993年11月に、統一ドイツ国立中央戦争犠牲者追悼所となったノイエ・ヴァッヘ（Neue Wache）にも足を運んだ。これはぜひとも見ておきたかったところである。碑文には「戦争と暴力支配の犠牲者に」（Den Opfern von Krieg und Gewaltherrschaft）とあって、追悼文（全文）は以下のとおりである。

ノイエ・ヴァッヘは
戦争と暴力支配の
犠牲者を追悼し
記念する場所である。

我々は追悼する、
戦争によって苦しんだ諸国民を。
迫害され、命を失った
その市民たちを。
世界戦争の戦没兵士たちを。
戦争と戦争の結果によって
故郷において、また捕虜となって、
そして追放の際に命を落とした
罪なき人々を。

我々は追悼する、
幾百万の殺害されたユダヤ人たちを。
殺害されたシンティとロマの人々を。
血統や同性愛の故に
あるいは病気や身体の弱さの故に
殺されたすべての人々を。
我々は追悼する、
生きる権利を否定されて
殺害されたすべての人々を。

我々は追悼する、
宗教的或いは政治的な信念のために
死ななければならなかった人間達を。
暴力支配の犠牲となり
罪なく死を
迎えなければならなかった人々を。

中央に、ケーテ・コルヴィッツの「死んだ息子を抱く母親」の像が安置されていた。この碑文は敗戦後40周年の年に当時のヴァイツゼッカー大統領が演説した有名な講演内容が基にされている。フンボルト大学（旧ベルリン大学）の中庭にある抵抗運動記念碑も見ることが出来たが、その碑文はカール・マルクスの有名なことば「哲学者はこれまで世界を様々に解釈してきたが、大事なのはそれを変革することである」が刻まれていた。

ドイツのジレンマ

この碑文を読み直しつつ、2008年の暮れの27日から2009年１月にかけて３週間にわたって続いたイスラエル軍のパレスチナ・ガザ自治区への猛攻を考えざるをえない。また、「ヴァンゼー会議場」記念・教育館の開館にあたって、展示のコンセプトをどのようにするかの企画に携ったFrau A. Ehmannにインタビューしたときの、彼女の言葉を噛み締めた。

彼女は、「ヴァンゼー会議場」として世界的に知られるこの建物で、1942年１月20日に何が行なわれたのか、またその理由は何だったのか、そしてその影響力はどのようなものだったのかを基本コンセプトにおいた。そして、「自立した市民が考え学ぶ場所」とするべく、展示にガイドをつけることはせず、例

えば子どもたちも自分たちで予めテーマを決めて展示を見、その後ディスカッションをして、実践的に自分たちで展示物の内容を理解し、判断していけるようなプログラムを作成したのである。これは、基本的に「加害責任を問うことをベースにした展示と教育の場」であるということが出来る。しかも彼女の考えで重要なのは、犠牲になったのはユダヤ人だけでなく、シンティ、ロマの人々、同性愛者、精神的病者などのマイノリティの人々もそこに含まれており、その人たちのことを外すことは絶対できないということであった。

私がインタビューした2006年には彼女は既にこの職を離れていた。その３年前に離れたとのことであった。そのようになった詳しい経緯についてストレートに聞き出すことはできなかったが、彼女の目指してきたドキュメントセンター構想のコンセプトが、ドイツの中でも今、必ずしも主流ではなくなってきていることがうかがえた。公費で教育のための出版物のほかDVDやCDでも出されていて、無料で手に入るものであったが、財政的なことを理由にベルリン市の政策変更で予算が削られるなどコンセプトの修正を余儀なくされることがしばしばあったことが、その言葉の端々から読み取れた。

彼女は明確に「ここは加害の家です」と語っていた。「犠牲者のための記念館であると同時に、はっきり加害者を対象にしています。犠牲者についての研究よりも加害者を扱う方が遥かに困難です」と。

ここでは教育活動に重点が置かれ、さまざまな職場の人たちのセミナーが開かれていて、ドイツ軍の兵士たちや、国会議員たちもセミナーに参加しているということだった。

彼女がいろいろ語ってくれた中で象徴的な話がある。ドイツでは先の若い68年世代の働きかけによって、過去の記憶を残すための「Gedenktag（記憶の日）」がいくつも設けられてきているが、その中で1996年に当時の大統領が、1945年１月27日に旧ソ連軍によってアウシュヴィッツが解放されたのを記念して、この日を「アウシュヴィッツの解放を記憶する日、そしてすべてのナチの犠牲者を思い起こす日」と決めた。ところが、この基本的な考え方が、年々変質していって、2006年１月の第60回国連総会で、イスラエルの提案でこの日が「ホロコースト記念日」とされることが決定されたという。この議案は、104カ国による共同動議として出されていたものである。

イスラエルの提案者は、このような人種差別による大虐殺は過去に例がなく、この言葉を使うのがもっともふさわしいと述べたという。だが、この「ホロコースト」（Holocaust）とは、もともとユダヤ教の全燔祭における丸焼きの供物を意味し、それが転じて「ユダヤ人の大虐殺」の意味で広く使われるようになったのである。重要なのは、このことば（それともう一つ「ショアー」（Shoah））が使われることによって、ここからユダヤ人以外のマイノリティの犠牲者たちが排除され、抜け落ちてしまい、この言葉に絶対的な意味が付与されて、陰に陽に、イスラエル政府が政治的な圧力としてこの日を使うことになったことである。彼女はこれを許すような風潮がドイツにもあること、その根底に、加害の歴史を掘り起こすことに消極的なドイツの現状があることを厳しく指摘していた。

日本はどうであったのか。

日本の現状

さて、2006年11月15日に日本の国会では「教育基本法改正案」が野党委員の欠席する中、与党の単独採決で衆議院教育基本法特別委員会で可決され、16日には衆議院本会議で可決された。その後12月14日には参議院特別委員会で強行採決され、15日の本会議で成立した。いじめ問題や相次ぐ自殺、未履修問題、

タウンミーティングの「やらせ」問題が連日大きく報道される中で、アンケートにみる世論調査でも、時間をかけた審議が必要だという回答が過半数を占めていた。そうした中で、教育の憲法ともいうべき基本法がなぜ拙速且つ強引に変更されなければならなかったのか。「愛国心を押し付け」「国家が教育を管理する」法案が通されることになったのか。

すでにこの国で教育の国家管理が進んでいたのは事実である。2002年の「心のノート」の配布は、戦後教育の中で、基本法の精神を生かして個々の子どもの特性を生かしていく方向とはうらはらに、「みんな仲良し、みんないっしょ」を合言葉とした集団教育のしばりで、画一化、均一化を平等教育に巧みにすり替えて、徐々に強めてきた管理教育が現場の教員を混乱に追い込み、分断させてきた。この新教育基本法は、そのほころびを一挙に国家イデオロギーで回収するものであった。ドイツがかつての戦争で学んだものは、二度とあのような全体主義国家に逆戻りしないために、当時の人々がどのように全体主義イデオロギーに巻き込まれていったかを子どもたちが学び、そのことによって、自らの責任で選択判断していく能力を養うということを教育の基本に置くことだった。ドイツの教育現場を目の当たりにしてきた今、今回改めてその日本の行政や立法に携わる政治家の品性、その人格や人間性こそが問われていることを思い知った。戦後の憲法の精神を骨抜きにしてきた根本的な人間教育の不在こそが、今日の日本全体の官主導の管理教育中心の「学校化」を招いたのである。しかもそこには偏差値による厳然たる格差が尺度としてあり、いじめや体罰が常態化している。そこから制服を脱ぎ捨て架空の名前をもって、繁華街に、そしてゲームやパソコンのインターネットの世界にエスケープせざるを得ない浮遊する子ども、また自死を選ぶ子どもを生み出してきたのではなかったか。大人社会に希望が見出せない子どもたちが、絶望のまなざしで今回の茶番を見つめていることを忘れてはならないだろう。

日本の社会は、戦後どのようにその加害責任を受け止めてきたのだろうか。端的に言って、過去に正面から向き合うことをしてこなかったし、近隣諸国との「和解」ができていなかった。何より、誰も責任をとらない体制の中で、戦争責任の問題が棚上げされてきたのである。そして国家権力の統制力強化を巧みに作り上げてきた。ここに見られるようなアンフェアなやり方こそが、この国の社会を蝕んできたのである。法治国家としては最低のあるまじき手本を示すことで、未来を担う若者から希望を奪い、絶望の淵に彼らを追いやることになったと私は考える。

2007年７月の参議院選挙で、重要法案の案件を次々数を頼んだ強行採決の繰り返しで成立させてきた安倍内閣に国民の不信任が突きつけられた。９月の通常国会開会直前の安倍首相の突然の辞任のあと政権を引き継いだ福田康夫も、2008年９月に辞任を表明、その後を麻生太郎が引き継いでいる。10月にアメリカのサブプライムローンの焦げ付きに端を発した世界的な金融危機を口実に、景気対策が第一と解散総選挙を先延ばししている。

むすびにかえて

2009年１月12日、チェコがEU・ヨーロッパ連合の議長国になるのを記念するオブジェがベルギー・ブリュッセルのEU本部に展示され、チェコの芸術家ダヴィッド・チェルニーによるこのオブジェがかたどっている各加盟国の紹介で、ドイツのところは高速道路がナチスドイツのカギ十字の形をしていて物議をかもしているとのニュースが流された。このオブジェに対して公式にドイツ側からクレームがついたとのニュースは聞いていない。おそらくナチス時代の過去に対して国をあげ

て向き合ってきたことは、世界が認めるところであり、むしろそれを知ったうえでのパロディとして、あるいはまた、潜在的にくすぶっているネオナチへの警告として受け止めたのかもしれない。

だが、ドイツは今回のガザ地区へのイスラエルの攻撃に対して、どのような外交的働きかけをしたのか、EU議長国としてフランスのサルコジ大統領がイスラエルに停戦の働きかけをしているニュースがあったが、残念ながら表立っては見えてこなかった。「ヴァンゼー会議場」記念・教育館の開館にあたって、加害責任を明確にした展示のコンセプトを打ち立てたFrau A. Ehmann の苛立ちの表情が眼に浮かぶ。

１月20日、バラク・オバマ（Barack Obama）氏が第44代アメリカ大統領に就任した。おそらく世界中がこの瞬間を待っていたことだろう。47歳のアフリカ系大統領は、そんな世界に向けて「新たな責任の時代」を発信した。多難な前途を思いつつも、改めて宇宙船地球号の舵取りがこの人に委ねられ、軌道修正されることに、仄かな希望を見出しているひとは多いだろう。だが、彼は明確にイスラエル支持の態度表明をしている。立ち会った者にはそれぞれに、その責任の自覚が求められている。彼の言動をこれからも注視していかねばならないだろう。

情報も経済も、あらゆるものがグローバル化した現代社会において、リアルタイムに起こる世界的な出来事を視野に入れながら、複眼で足元の問題を見て行かねばならない。教育は未来世代の育成であり、そのために何ができるかを問い続けることが、課せられた任務ではないかと思わずにはいられない。

註

１）佐藤学著『学校を変える―浜之郷小学校の５年間』 小学館　2003年

２）この経緯については、名古屋大学の近藤孝弘氏の著『国際歴史教科書対話―ヨーロッパにおける「過去」の再編』（中公新書）に詳しく述べられている。

３）当初、自民党の国会議員を対象とした試写会が開かれ、週刊誌があたかも内容が偏っているかのような紹介記事を載せたことで、上映予定をしていた映画館に右翼が圧力をかけ、またインターネットでいやがらせがあったこともあって、右翼の妨害を怖れ、中止や延期という自己規制の風潮もあった。だが、監督や映画を見た関係者が、政治的な色眼鏡でなく、内容をみてから判断してもらおうという姿勢で積極的に試写会でPRしたことで、上映の道が開かれた。実際にはその後上映希望館がさらに増えて連日多くの観客がこの話題作を見ることになった。上映劇場のブログ書き込みの総合評価で肯定的評価が三分の２を超えているのをみて、日本の変革のかすかな兆しを感じ取ったのは私だけだっただろうか。政治的なことに過敏すぎる日本人の心性の問題は、ともすれば、事無かれ主義に堕して、多事争論を欠かせない民主主義の原点を見失わせてしまったかにみえる。形の上では民主国家の体裁をとりつつ、実際には主権者としての自覚や責任が欠落し、無責任な風評や多数意見になびく傾向があり、外から、とりわけアジアの国々からは、なお全体主義国家のイメージが払拭されず、警戒される一因になっている側面は否めない。（参照 「問われる“表現の自由”～映画『靖国』の波紋」NHK「クローズアップ現代」No.2576　2008年５月７日放映番組ほか、上映劇場の書き込み）

４）東京都教委は、2004年10月23日、すべての教職員に対して卒業式や入学式などの学校行事に際して、「国旗に向かって起立し、国歌を斉唱することを命じ、違反したものには服務上の責任を問う」という不当な通達を出している。「国旗・国歌」法には強制力はない。また中学校の家庭科の教諭である根津公子さんは、1994年に勤めていた八王子市立石川中学で、職員会議を無視して校長が掲揚した日の丸を降ろして処分されて以来、９回におよぶ処分を受けている。

５）ついでに言えば、この問題はすでに責任ある諸官庁では何年も前からわかっていたことであって、この時期、表立って一切取り上げられていない重要なことは、所謂進学校で、家庭科の時間がずっと未履修で来ているということである。この問題が取り上げられないまま、今の家

庭崩壊や家族の離散問題があたかも現憲法の欠陥であるかのようにすり替えられ、また暗に「ゆとり教育」のせいでもあるかのように言われて、最も基本的で最重要原則である男女平等の文言も消されようとしていることに、メディアの言及はなかった。少子化問題が深刻になってきているなかで、家族をめぐるさまざまな問題は、女性が家庭に戻れば解決するというのは本末転倒であり、ますます差別や格差を助長することになるだろう。発想そのものに、社会的弱者への視点が抜け落ちていて、事態の深刻さがうかがえる。

6）この日独平和フォーラムでドイツの子どもたちが1995年に日本にやってきた時の体験をレポートにしたものが、“Geschichte Leben : Deutsche Schüler in Japan”という本にまとめられて、1999年に出版されている。ヒロシマで原爆詩人の栗原貞子さんにインタビューしたり、丸木位里・俊さんの原爆の図や南京大虐殺の図を見たときの衝撃が語られているほか、異文化に接した驚きや発見、また日本の若者との交流が、何よりも双方に大きな絆を作っている事が見えてくる。この報告書を読むと、改めてドイツの子どもたちが被爆の実態を深く理解していく素地が、日頃の歴史教育の中で培われていることがよくわかる。どのような日常の歴史教育がそこにあるのかについて、Gedenktagに彼等が書いているなかから、今回直接話を聴くことの出来た女子学生イヴォンヌ・キュッパー（Yvonne Küpper）のものを一つ紹介したい。ドイツの歴史の授業内容がよくわかる。（日本語訳は浜田和子さん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

イヴォンヌ・キュッパーとベンヤミン・ミーツナー（Yvonne Küpper und Benjamin Mietzner）ハンナ・アーレント・ギムナジウム（高校）とレオナルド・ダ・ヴィンチ・ギムナジウム（高校）のプロジェクト・デー“記憶の日（記憶を思い起こす日）”

私の名前はイヴォンヌ・キュッパーで、こちらは私の同級生のベンヤミン・ミーツナーです。私たちはベルリンのハンナ・アーレント・ギムナジウムの生徒です。私たちの学校のプロジェクト・デーの計画と実施についてお話ししたいと思います。それは隣のレオナルド・ダ・ヴィンチ・ギムナジウムと同じようなやりかたで実施されました。

プロジェクト・デーは特定のテーマについて授業のときよりも集中的に学び、特殊なメソッドで成果をもたらすことを目的としています。

プロジェクト・デーは2005年４月28／29日に私たちの学校で行われ、テーマは戦争終結60周年でした。それは“記憶の日”と呼ばれる日で、教師たちが計画し、生徒のグループがその準備と実施を引き受けたものでした。

記念の催し物の幕開けは歌と朗読の夕べで、ヘルス・ヘルツィギアさんがピアニストのアレキサンドラ・ゴットハルトさんと一緒に出演しました。ユダヤの歌が披露され、ユダヤ人の作家のテキストが朗読されました。ヘルスさんは聴衆をときどき笑わせましたが、深く考えさせることもしました。プロジェクト・デーの間にヘルスさんと彼の父親が時の証人として参加し、戦後のベルリンでの生活について話してくれました。この他にこの特別形態の授業のために考えたことをお話ししようと思います。

７年生と８年生、12歳と13歳の生徒たちはユダヤ博物館を見学しましたが、４つのテーマが用意されていました。ユダヤの伝統や文化、人生の概念について博物館の特別の案内をうけただけでなく、実際的な活動、たとえばユダヤの宗教上の規則に則ったレシピを作ったり、ヘブライ語で名前を書いたり、ユダヤの宗教的なパンを焼くなどしました。こういう活動を通じて、生徒たちに戦後ドイツではほとんど失われてしまったユダヤ文化を知らせようというものです。生徒の中にはこのことに大きな関心を持つ者もいました、というのは本から習うのではなく、異国の生活世界を具体的に知ることができるからです。失われたように思われたものも、探求することができます。

年長の生徒たちにはプロジェクト・デーに40の部分プロジェクトが出され、そのうちから選択することができました。プロジェクトは２つのブロックに分かれ、最初のブロックは９時―11時、２つめは12時―14時でした。こういうふうに時間が分かれていたので２つの興味のあるプロジェクトに参加することができました。生徒たちは第二次世界大戦とナチの政策のテーマに取り組み、時の証人たちの話を聞きました。

プロジェクトはたいへん多様でした。生徒の多くは“大量殺戮兵器としてのサイクロンB”のテーマ、あるいはアウシュヴィッツ強制収容所の医者で人体実験をしたメンゲレ博士に興味を持ちました。メンゲレは冷笑家なのか、怪物か、良心のない研究者か、あるいは何も知らない医学者なのか？と疑問に思いました。生徒たちは加害者のテーマをよく選びました。“それによって二度と同じことが起こらないように”と15歳のティースは言います。小グループに分かれて時の証人たちの驚愕するような体験の報告を映画にしたものを見、またメンゲレについてのたくさんの記事を読みました。生徒にはインフォーメーションの資料が用意されていて、生徒はテーマについて自由に作業し、それについて討論をすることができました。「人格が分裂していた」と15歳のクリストファーは加害者メンゲレについて考えます。このプロジェクトの終わりになって生徒たちの意見は一致していました：このテーマは一日では短すぎるということでした。それでも皆この別の学習の可能性に満足していました。

生徒たちは時の証人たちの講演や質問によって、個人的な理解の手がかりを見つけ出しました。まもなく87歳になるというガブリエレ・レーヒ＝アンツバッハさんはベルリンで戦争終結を体験しました。彼女は生徒たちに、自分が住んでいた狭い路地にロシアの戦車が入ってきたときのことを話しました。何が起こるか全くわからないということが一番つらいことだったということです。「わかっていたのは、なにか恐ろしい事が起こるということだけでした」とレーヒ＝アンツバッハさんは報告します。それで、初めて出会わしたロシア兵が彼女にパンをくれたときには大変驚いたということです。彼女は占領時代を、これから起こることは何か意味があるのだと信じて生き延びました。「このことはあなたたちの人生にも大切なことかもしれません」と彼女は私たちに言いました。話を聞いていた生徒たちは皆うなずきました。

「記憶の日」は生徒たちが時間割を自分たちで決めました。生徒たちはことが現在と関連していることがわかると、大きな関心を持ちました。サイクロンBと青酸が反応したものは、現在も青酸カリとして人間にたいして使われるとパトリツィア・ローバ（18歳）は報告しました。アメリカ合衆国では死刑執行のために使われ、テロリストは武器として使ったと。

メンゲレのプロジェクトでは生徒たちは、医師が得た知識は今日応用されるべきかどうかということについて、熱の入った討論をしました。教育学者のヴォルフガング・メセトはナチズムについての授業でこう説明しました：「このことは今現在にも関連があるので、単なる歴史的なテーマとしてだけ扱う事はできない。」

「モノリィツィエン」プロジェクトは生徒たちに大きな人気を呼びました。プロジェクトは役割遊びで参加者は仮想国「モノリィツィエン」の政府やさまざまな社会の周縁グループに属します。仮想国「モノリィツィエン」のいろいろな地位を占めるということです。この国はひどい経済危機に陥ってはいますが、まだ良い社会制度を持っています。それで多くの移民を引き付けます。参加者はさまざまな役割に自分を置きましたが、最終的に、その国の社会問題の責任を移民の人たち押しつけること、移民の人たちには個人的に全く責任のない問題の責任を負わされることが、どんなに不当であるかをそれぞれの役割で経験して驚きました。

そこに歴史的な関連性を見ることもできます。私たちはなぜ社会の周縁グループが、彼らに責任のない問題の原因だと言われなければならないのかと、疑問に思いました。役割遊びの終わりにはこのことが明確になって、生徒たちは大きなショックを受けました。

ノルウェー、日本、イスラエル、ポーランドの生徒が私たちのプロジェクトに参加して、ドイツでの第二次世界大戦とナチズムのテーマの討論を体験しました。生徒たちの中には寛容のなさや人種差別主義がいかに現在の問題であるかを経験した人がいました。ノルウェーの生徒はベルリンの電車のなかで一人の黒人が見下げられた扱いを受けていたのを見ました。彼はハンナ・アーレント高校の生徒たちにこのことをどう思うかと聞きました。生徒たちはかなり当惑していました：外国人を排撃する同じ学校の生徒に対してもどう対応したらいいのかわからなかったのです。「たとえ納得させたいと思って

も、あの人たちに考えを変える気がないというのが問題です」とドイツの生徒がノルウェーの生徒に話しました。

準備について少しお話しします。たくさんの時の証人たちが私たちの学校に招かれて、プロジェクト・デーに第二次世界大戦中、市民としてや兵隊として、或いは政治的、宗教的迫害者として体験したことを報告してくれました。そのほかに時の証人たちは生徒たちのインタヴューに応じ、個人的にも質問を受けてくれました。それによって私たちは個人的な手がかりを得ることができました。時の証人たちの情報は私たちのホームページで読む事ができますし、他のプロジェクトについても多くの情報を得る事ができます。

学校外への遠足も可能でした。あるグループは私たちの区を２時間歩いて、ナチ独裁に抵抗したノイケルン区の市民の歴史の跡を訪ねました。生徒の多くはこのことを今まで知らなかったので、自分たちの区を新しい目で見るようになりました。

もう一つの別のグループはベルリンの中央区を歩き、アルベルト・アインシュタインがユダヤ人として迫害される以前、1920、30年代に働いていた場所を探しました。アインシュタインは早い時期にベルリンを出ることができました。彼は世界中で尊敬される科学者です。彼がベルリンで働いていた場所については今まで生徒の誰も知りませんでした。

またあるグループは連合国博物館を見学し、第二次世界大戦がベルリン市民に与えた　影響について学びました。

別のグループはアンネ・フランクの人生と運命についてCD-ROMを使って作業ペーパーを作り、戦争を生き延びることができなかったユダヤ系ドイツ人が体験したことの跡を訪ねました。

残念ながらプロジェクト・デーの開催に、全く障害がなかったわけではありません：前夜に極右の過激派が学校中にシールを張り、脅迫したので、プロジェクト・デーは警察の保護のもとに行なわれなければなりませんでした。極右の過激派は残念ながらドイツでとみに支持者を得てきていますが、彼らの目的の一つは政治的に考えの異なる人たちを脅しおびえさせ、外国人排斥のスローガンを広めることにあります。この喜ばしくない政治的な傾向をベルリンの両親も教師も心配しながら注目しています。

それでも幸いなことにそのほかには問題はありませんでした。

終わりにドイツと外国の生徒たちの討論が行なわれましたが、その際、若者が右翼のグループに入ったり、そこから影響を受けたりすることを妨げるためには、教育が基本的な前提条件であるということで、皆の意見はすぐ一致しました。しかしこういうことを阻止するためには、背景や事実を知ることだけが役立つのではなく、人種差別主義に出逢わしたら、日常生活のなかでも勇気を示すべきだと思います。お互いを知りあい、偏見を壊すことはイスラエルとドイツの生徒の交流の有意義な体験でした。

この記念日に極右の人たちと話し合うことができなかったのですが、それでも私たちは歴史を批判的に考えることが大事なことであること、このテーマをナチだけにゆだねないことを示しました。

私たちの学校で行われたプロジェクト・デーを少しおわかりいただけたことと思います。ご質問がありましたらどうぞ、お答えします。

ご静聴ありがとうございました。